

〈資料〉

## 交通史の一場面—浜街道と陸前浜街道について

長久保光明

### 一、はじめに

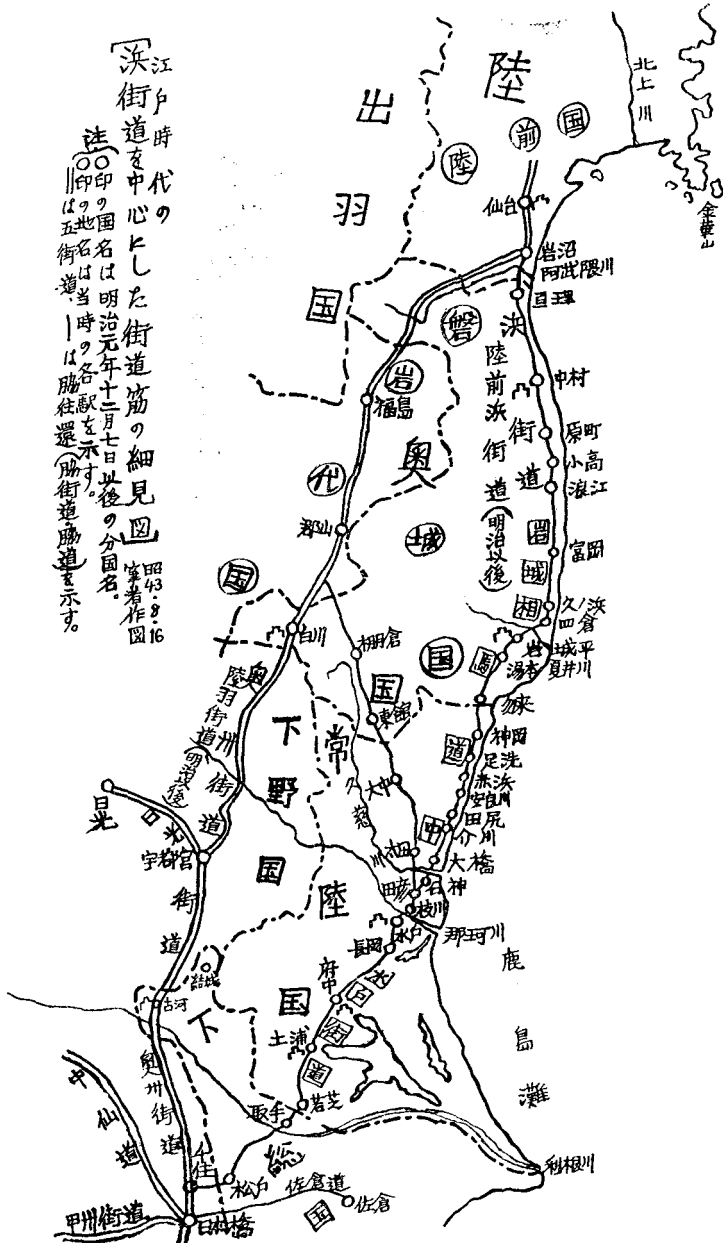
武蔵国から下総国・常陸国・陸奥国にまたがる江戸時代の浜街道と、明治初年からの陸前浜街道については専門書を初め、郷土研究者も混同して使用しているので明確にする必要がある。陸前浜街道の五字に迷う者も少なくない。ちようど奥州街道と陸羽街道の混同も時代的錯覚を起こしている。

### 二、海道と街道と脇街道（脇往還）

海道は古代から中世に山道に対する海道（東海道・南海道・西海道）で、海国の道筋を総称した大道である。江戸時代には公用旅行者や参勤交代の大名に供せられ、五街道は江戸中心の公道であり、本街道と称した。本街道から派出する道路が脇往還（脇道）であり、浜街道もその一つであった。

五街道や脇街道のうち、海のない国は正徳六年（一七一六）に道中<sup>①</sup>と呼んだ。しかし五街道は五海道<sup>②</sup>とも書き

江戸時代の  
街道を中心とした  
街道筋の細見図  
注 〇印の地名は明治元年十二月七日以後の分国名  
||印の地名は当時の各駅を示す  
|印の地名は勝往還(船街道)筋を示す



昭和三年八月十六日  
実地調査作図

一定していなかったが、江戸中期から街道を称するようになった。元和元年（一六一五）から幕府直轄<sup>④</sup>にした。そして庶民は支線の脇街道を利用した<sup>⑤⑥</sup>。

### 三、陸奥国と常陸国

陸奥国はもと道奥<sup>みちのおく</sup>で、つまって「みちのく」の国となった。陸奥国は陸州<sup>りくしゅう</sup>を六州と簡略化し、平安時代以後に用い、大和朝廷の勢力範囲の国々よりも奥地の開拓を意味する<sup>⑦</sup>。そして東奥はあまり使われないが、江戸時代の文人<sup>⑧</sup>の称である。

常陸国は『常陸風土記』に「東海の大道常陸路」とあり、東海道の属し常陸国府以北は陸奥海道で、奥羽開拓の最前線であった<sup>⑨</sup>。

そして陸奥国は出羽国と同じく東山道の一国で、大化改新による設置であり、江戸時代には伊達・相馬・松平・南部氏などの藩が分立し、明治元年に岩代・磐城・陸前・陸中・陸奥の五か国<sup>⑩</sup>に分国し、出羽国は羽前国・羽後国の二か国になった。この事実を混同して陸前国や羽前国を江戸時代の国名と直観する向きが多い。常陸国を含めその他の諸国は明治以後も同じ国名である。

### 四、浜街道の概念

#### 1 陸奥国の浜街道

奈良時代には陸奥国の前身の石城国<sup>いわき</sup>は奥州の南偏で石背国<sup>いせのくに</sup>（今の福島県西部）と相對し、東海岸に位置し東海道<sup>ひがし</sup>ま

たは浜街道と称していた。鎌倉時代に頼朝が奥州征伐のとき、「東海道大將軍千葉常胤の軍は浜通りを（下略）」と『東鑑』に述べている。浜通り<sup>⑧</sup>は今も福島県の海側を称している。

この浜街道の名称を諸書と照合してみると次のようになる。

「陸奥国の入口に至る福島県は、関東から北進する浜街道と奥州街道とが縦貫していた<sup>⑨</sup>」とあり、「浜通りは海岸低地帯にあり、中通りは阿武隈川の谷にある<sup>⑩</sup>」とある。「昔は浜街道は勿来の関、奥州街道は白河の関があり、みちのくの南境を守り、この関門を北へ越すと一方は浜街道（下略）、江戸時代の浜街道は南の勿来の関から平・中村・岩沼で、中通りから来た奥州街道と合していた。（下略）、江戸時代に入ると、中通り・浜通りは親藩や幕領で分断され、江戸中期には両街道を中心に地方産業が盛んになった<sup>⑪</sup>」とある。また「浜街道は水戸街道の延長とも考えられ、奥州磐城宇多両郡の諸侯は参勤交代のとき、浜街道の往来を禁じられ奥州道中を迂回した。そして浜街道の終点は岩沼で、万延元年（一八六〇）から文久・元治・慶応にかけ幕吏は岩沼を過ぎ箱館を往来し、岩沼は奥州街道に入る拠点でもあった<sup>⑫</sup>」と述べている。

## 2 東海道ひがしの意義<sup>⑬</sup>

仙台の先の宮城野から以北を「奥の細道」ともいい、南の東海道に連なっていた。これは本街道（奥州道）に対して東方に並行していたから呼称し、奥地の小路であったから「奥の細道」ともいった。東海道も奥の細道も同一の街道で奥州道中に対する方向的名称であり別路ではなかった。

## 3 常陸国の浜街道

各書に述べられているのを要約すると次のようになる。

(1) 明治以後の宮城県街道のうち、昔の浜街道は福島県境—岩沼。明治からの東浜街道は広瀬—気仙沼—高田。福島県の浜街道は常陸平瀧—平—富岡—中村—宮城坂元。茨城県の浜街道は東京—石岡—水戸—大津—磐城窪田に至る<sup>②</sup>。

(2) 海道ハ東海ノ大道ナリ、伊賀伊勢以東本國マテ十五箇國、皆東海道ナリ、コレヲ海道ト称ス(中略)、陸奥國中ニ海道ノ称アリシコトハ日本後紀ニ、海道十駅ハ本國多珂郡奈古曾関ヲ越テ菊多郡ニ入シヨリ、海道四郡ノ駅家ヲイヘリ(中略)、海道ハ江戸ヨリ水戸ニ至ルノ道ナリ(下略)、延喜中、駅路ノウチ陸奥海道四郡ノ地ヲ東海道ト云シコト相馬文書ニ見ユ。(中略)茨城郡水戸ヲ起程ノ地ト定テ、東南ニ向ヒ、下総河原代村ニ達スルヲ江戸海道ト云ヒ、北方ニ走テ、陸奥大塚村ニ出ルヲ棚倉海道ト唱ヘ、北ニ進テ少ク東ニ向ヒ、陸奥関田村ニ至ルヲ岩城相馬海道ト呼ブ、スベテ之ヲ大道トナス<sup>③</sup>(下略)。このように水戸から江戸までを江戸街道(海道は江戸中期から用いない)、江戸からは水戸海道、水戸から陸奥国に入るを岩城相馬街道(道中)と称した。これら二つの呼称は地域の藩領的区分であり、浜街道の略称にすぎない。

(3) 常陸国の古地図<sup>④</sup>には府中(石岡)から南は「江戸街道」と記されている。

(4) 常陸国多珂郡(高萩市)の古文書<sup>⑤</sup>には、岩城海道は水戸青柳—岩城平に至る海道で、略称として「奥州東通り」ともいった。

(5) 常陸国は石高九十万三千七百七十八石四斗五升八合、村数千六百七十七ヶ村、東西道程十五里二十一町、南北道程三十二里十二町。そのほか往還道の小道、一里塚もある<sup>⑥</sup>。

(6) 脇街道は江戸から水戸に至る水戸道中が最も重要で、文政五年(一八二二)、一二藩の大名が参勤交代に用い、幕

末には往来が繁しく、千葉の佐倉道中を加え、五街道と合わせて七街道と呼ぶ説もある。水戸から以北、勿来をこえて陸奥国に通ずる浜街道は岩城相馬道中ともいわれた<sup>⑩</sup>。

(7) 江戸街道（水戸街道）が、岩城街道とあわせて陸前浜街道と呼ばれるようになったのは明治になってからである<sup>⑪</sup>。

(8) 松岡村赤浜（今の高萩市）の白坂は旧奥州往還である<sup>⑫</sup>。

(9) 古地図<sup>⑬</sup>に江戸—水戸間は水戸街道、水戸以北は枝川・石神・助川・磯原を経て相馬方面を岩城相馬海道といい、前記と合して浜街道と呼んでいる<sup>⑭</sup>。

(10) 江戸時代の史料によると、各村について岩城道筋、奥州岩城往還、奥州往来の駅路、岩城海道駅所と記してある<sup>⑮</sup>。

(11) 岩城海道に沿う日立地方の宿駅、久慈川の岩城海道の渡し。天保十一年『諸国順覽懷宝道中図鑑』に「浜通奥州街道」とある<sup>⑯</sup>。

(12) 江戸より水戸道中、岩城相馬等へのみち、仙台道中の記事がある<sup>⑰</sup>。

(13) 宝暦十年（一七六〇）に、長久保赤水は四十四歳のとき浜街道を従者と歩き、陸奥国—出羽国—越後国—下野国を回わり郷里の常陸国多珂郡赤浜村（今の高萩市赤浜）に帰った<sup>⑱</sup>。

これは後に長久保中行（赤水の従甥）が校注をして東奥紀行（長久保赤水著）として板行された。

(14) 江戸時代の古地図二種類<sup>⑲</sup>にも、街道名の記入はみられない。

(15) 日本歴史地図にも各社版ともに街道の記入はないが、水戸路や佐倉路は記してある。ただ一つの専門書<sup>⑳</sup>の付図に

は浜街道と記してある。

## 五、奥羽二州の分国と分県

明治元年十二月七日東京城日記（慶応四年二月二十日から明治十年一月二十二日までの政府の布告）の御布告書写し<sup>⑧</sup>に、

奥羽兩國ハ曠漠、僻遠之地ニシテ、古來ヨリ教化治ク難敷及儀ニ有之候ニ付（中略）厚ク御手ヲ被為尽思召ヲ以、陸奥國ヲ磐城・岩代・陸前・陸中・陸奥ト五國ニ、出羽國ヲ羽前・羽後ト二國ニ分國被仰付候條、此旨可相心得事。

とあり、分国の後、明治四年の廃藩置県で国名は公式には廃止したが、その後も慣行として存続した。その例として茨城県治一覧表（明治十二年、茨城県刊）や、日本帝国第二統計年鑑（明治十六年、内閣刊—全国犯罪者本籍名簿）や、日本憲政史第二卷（大津淳一郎著、昭和二年—明治十三年や同十七年の裁判所言渡書）にも、何県何国何郡何村のように記してある。

廃藩置県後は陸前国は宮城県に、磐城国は福島県に編入されたが、陸前や磐城などの国名を昔の旧国名（江戸時代まで）のように誤らないように注意したい。

## 六、管轄地図の作製<sup>⑨</sup>

明治元年十二月には諸藩領図面作製や府県管轄地図の差出し、同四年には地理・戸籍取調、同五年には全国地図作製などが行なわれ、江戸時代の国絵図作製よりは科学的となり、明治政府の富国強兵策推進の基盤となった。さらに

同八年には太政官職制の歴史課や地誌課が置かれ、同九年に諸県廃合、同十一年に郡区町村編成法と参謀本部条例公布があった。

### 七、陸前浜街道について

諸書にあるのを要約すると次のようになる。

(1) 水戸ハ一都会デ城邑ニシテ一万九千ノ人口アリ、上市、下市ニ分レ、本城ハ其中央ニアリ。官道ハ石岡・土浦ヲ過ギ西南下総ニ通ズルヲ水戸街道ト呼ビ、東京ト相距ル三十一里。陸前浜街道ハ助川・伊師ヲ經テ東北磐城平ニ至ル、二十六里ナリト云フ<sup>⑧</sup>。

(2) 明治七年の茨城県地図に「陸前浜街道」とあり<sup>⑨</sup>、明治以後の新街道名の最初の資料とみてよい。

(3) 南方の第十四号国道は石岡・土浦・取手を通り、千葉県に入りて東京に通ず（旧江戸街道）。石岡から北にある陸前浜街道は多賀の海岸を北上し、福島県に入り仙台に通ずる。これを第十五号国道という<sup>⑩</sup>とあり、当時の国道も番号呼称の公式語であることがわかる。陸前浜街道は通称号であるが、一般に今日まで継続使用されている。

それでは明治何年から用いたか関係先へ照会しても記録が見当たらないとの返事があった。しかし(2)でわかるように明治七年以前である。政府発行の迅速二万分一仮製地形図（内務省地理局、明治十七年から発行）にも陸前浜街道が載っている（明治十三年測量）。その後の国土地理院の二万五千分一と五万分一の両地形図、二十万分一地勢図（水戸・福島・仙台）にも載っており、二十万分一の仙台図幅の宮城県亘理町の道路側に記されているのが最後の呼称である。



さらに明治二十八年民間発行の地図<sup>⑧</sup>には、宮城県は陸羽街道・浜街道・東浜街道、福島県は浜街道、茨城県は東京街道・陸前街道が記されているのをみると、明治になってからも昔の「浜街道」を踏襲している地域もあることがわかる。また明治十一年三月二十六日東京曙新聞第六号に「福島県下浜街道ノ儀、從來磐城国檜葉郡四ツ倉駅ヨリ久ノ浜駅ヲ経、広野駅迄毎海浜砂莫通行ノ処、今般新聞相成候八坂通ヲ以テ、自今陸前浜街道ト改定候条、此旨布告候事。明治十一年三月二十五日太政大臣三条実美」（新聞集成明治編年史第三卷、財政経済学会、昭和三十三年所収）とあり、陸前浜街道は小地域的に福島県や宮城県でも通称として呼称されたことがわかる。

江戸時代の浜街道（水戸街道・江戸街道・岩城相馬街道または道中を用う）は、次第に変形や廢道となったりして面影がうすれているが、茨城県高萩市赤浜の「浜街道」（明治初年からの陸前浜街道）は昔の面影がみられる。電柱もなく、道路も舗装でなく、松林の樹令二百年以上のもある。その道沿いに慶長十年（一六〇五）に長久保氏来住地が残る（今は長久保源藏氏宅地、地理学者の長久保赤水もこの屋敷で生誕）、ここから北へ一キロ行くと字北原といつて赤水が七歳（享保八年）のとき両親と新屋を開いて農に従事した旧宅が二軒ある（長久保敬信・同厚の両氏宅）。赤水は六十一歳まで新屋で暮し日本地図を編集し、安永七年（一七七七）六十一歳の十二月に江戸小石川の水戸藩邸に浜街道を上ったのである。

#### 八、浜街道と陸前浜街道の混同

茨城県の歴史地理を研究される方々への足掛りとして諸書の要約を列挙して、誤りのないよう参考に供したい。この混同は茨城人の盲点でもあり、他県の人たちも関心を持ってゆくことはたいせつと考えている。

(1) 茨城県郷土研究 茨城大学教育研究所編昭二八年。「江戸時代の交通路―二七〇頁に、江戸時代に於ける主要幹線は陸前浜街道と陸羽街道云々」は「陸前浜街道」は「浜街道に、「陸羽街道は「奥州街道」と訂正を要する。また「近戸時代の主要街道は次に示す通りである。1 陸前浜街道（中略）、9 陸羽街道云々」も同じ。

(2) 水戸大観 茨城民報社昭和二九年。交通の項（四九頁）「昔の陸前浜街道」も同じ。

(3) 日本地名事典第一巻朝倉書店 昭和二九年。水戸市の項（六五四―六五五頁）「近戸時代の陸前浜街道は（下略）、陸前浜街道に沿うて開かれた本町通りは宿場的機能（下略）」も同じく「浜街道」にすべきである。

(4) 教材国土現勢誌 国土地理協会 昭和三〇年。水戸市の項（二二頁）「道路はかつての陸前浜街道云々」も同じ。  
（、は筆者注）

(5) 茨城の歴史（注②） 山川出版社刊の一六四頁―交通の発達「水戸道中と合わせて、陸前浜街道とも呼ばれた。」も同じ。なお明確には明治初年から陸前浜街道云々とすべきである。

筆者がこれらのことについて昭和四十二年十二月に公表した詳報<sup>⑧</sup>もあるが、本稿における論点はただ一つの街道名であるが、時代的感觉を失わないように、正しい表現を継続するようにしたい。これから街道名を研究し、街道図を記すときの指針となれば幸いである。私が指摘したのに朝倉書店の旧版日本地名事典と、国土地理協会と、大明堂とあり、いずれも再版の時に訂正をするとの回答があった。また本稿を参考的に読まれた者も出版社も、良心的に訂正をしてゆくように願いたい。

なお陸前浜街道は明治五年の呼称である（『近世史略』巻一、山口謙著、明治七年刊）。区間は東京4千住駅から陸前岩沼駅に至る（下略）とある。

## 注

- ① 史学会編 史料日本史下巻五二—五三頁 山川出版社 昭二七。  
ジャポニカ第四巻九九頁—街道(小野信二)・小学館 昭四三年。
- ② 岩波講座 日本歴史第十回—五—六頁 岩波書店 昭九年。
- ③ 宮城県史 5 地誌・交通史—五〇—五〇九頁、交通史—大島延次郎、宮城県史刊行会 昭三五年。
- ④ 日本産業史大系 4 関東編、地方史研究協議会編—四頁、東大出版会 昭三四年。
- ⑤ 現代教養百科事典 7 歴史—三一—八頁、暁教育図書 昭四三年。
- ⑥ 新日本史大系第四巻近代社会—二九八頁 小葉田淳編 朝倉書店 昭二七年。
- ⑦ 東北の歴史 豊田武編 上巻—七三頁 吉川弘文館 昭四二年。
- ⑧ 大日本地名辞書下巻 陸奥国、吉田東伍著 明治四〇年。
- ⑨ 地理と世界の歴史 原随円編 日本篇下—二二二頁 雄渾社 昭三一年。
- ⑩ 新世紀大辞典 学習研究社 昭四三年。
- ⑪ 地名の成立 山口恵一郎著—一二〇頁 一四八頁 徳間書店 昭四二年。
- ⑫ 郷土の地理 3 東北編Ⅱ 福島県の地理 安田初雄 七、交通の発達—二二五頁 宝文館 昭三五年。
- ⑬ 新講座地理と世界の歴史 日本編下 柴田実他編—二三三頁 雄渾社 昭三一年。
- ⑭ 教材国土現勢誌 国土地理協会 福島県一七七の三—四二 昭三〇年。
- ⑮ 前掲(3)に同じ。
- ⑯ 前掲(3)に同じ。
- ⑰ 大日本管轄分地図 明治二八年刊の複製 人文社、昭四三年。
- ⑱ 新編常陸国誌巻六 行路—千百六十一—から千百七十八頁。明治三四年。
- ⑲ 常陸国郷村・道路図 天保七年(一八三六)彩色手書き図 内閣文庫蔵。
- ⑳ 松岡郡鑑・松岡地理誌・水戸松岡道程帳(正徳五年)水戸彰考館蔵、写本。
- ㉑ 常陸国郷帳付録 元禄十五年(一七〇二)四月(写本)水戸彰考館蔵。

- ②② 茨城の歴史 満井・瀬谷・豊崎三氏共著 山川出版社 昭三二年 交通の発達―一六三から一六四頁。
- ②③ 茨城地理学会研究紀要第十五号 昭四二年 江戸時代における水戸街道の歴史地理的考察―茨城大学堀口友一。(歴史地理学会に寄贈)
- ②④ 松岡村誌 大正二年―二〇〇頁。
- ②⑤ 下総国輿地図 嘉永二年水戸の鶴峯戊申著。常陸国全図 嘉永年間 鶴峯彦一郎著。
- ②⑥ 綜合郷土研究中巻 茨城県師範学校・茨城県女子師範学校共編 茨城県 昭一四年 江戸時代の交通路―山口孝義―三四三頁。
- ②⑦ 茨城県史料近世地誌編 茨城県 昭四三年水府志料(小宮山楓軒著 水戸藩士)―二六六から三九三頁。
- ②⑧ 日立市史 日立市 昭三八年 日立地方の交通(瀬谷義彦)四三六から四四四頁。
- ②⑨ 増補海陸行程細見記(四六丁) 醇雅子校正 天保七年(一八三六)刊 大坂 秋田屋良介。
- ③⑩ 日本地理学の先駆 長久保赤水 住井すゑ子著 大阪精華房 昭和一八年。
- ③⑪ 新刻日本輿地路程全図 安永八年(一七七九)初版 長久保赤水著(地理学者、天文研究者、水戸藩儒者)と、大日本沿海輿地全図 文政四年(一八二二)幕府に献上、伊能忠敬著。
- ③⑫ 前掲④の付図に記入。
- ③⑬ 新聞集成明治編年史第一巻 維新大變革期 中山泰晶編―二二〇頁 昭三三年。
- ③⑭ 前掲③に同じ。
- ③⑮ 改正日本地誌要略 大槻修三編 大阪 明治十一年刊(全六冊)―巻二の東海道の項。
- ③⑯ 茨城県管内区画略図 明治七年十二月編述 水戸杉平俊雄編 根本健助刊 縮尺なし、有彩色 茨城県立図書館蔵。
- ③⑰ 常陸郷土史(多賀郡の巻) 茨城郷土研究社昭一二年、常陸の交通史―一六八頁 茨城県立図書館蔵。
- ③⑱ 三都市四十三県三府一庁『大日本管轄地図』明治二十八年刊。昭四三年復刻、人文社
- ③⑲ 茨城の民俗第六号 茨城民俗学会 昭四二年十二月二十四日刊。―地名についての考察―浜街道をめぐる― 長久保光明 三六頁から四〇頁。(歴史地理学会に寄贈)